

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 新羅の碁石と琴棋書画

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所<br>公開日: 2020-03-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 清水, 康二, SHIMIZU, Yasuji<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/883">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/883</a>  |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 新羅の碁石と琴棋書画

清水 康 二

## I. はじめに

近年、囲碁史研究上の重大な発見があった。5世紀の新羅王陵の一つと目される大韓民国慶尚北道慶州市皇南大塚南墳から出土していた漆器の底に書かれた「馬朗」という銘文が、『抱朴子』等に記載される西晋時代の「棋聖」と称された人物の名前であることが指摘されたことである（정일・이은석 2018）。この漆器は碁笥と考えられているが、これによって皇南大塚南墳や天馬塚古墳から出土していた碁石状の小石群が実際に囲碁関連の副葬品である可能性がきわめて高くなったと言える。これらの石を碁石と認定するのに躊躇されていた点は、いずれも自然石であって加工されたものではなく、白黒明確な石とは別に、漠然とした白黒の差はあるものの中間的なものが多数あることからである。

筆者も囲碁の変遷を概観した際に、韓半島の皇南大塚南墳、天馬塚古墳等の小石群を取り上げたものの、これらが本当に囲碁関連資料であるのかどうかについて、一抹の疑念を抱かずにはいられなかった（清水2017）。このように新羅の墳墓から出土する小石群について、韓国の囲碁史研究者は注目をしていたものの（李熙濬2013）、日本の囲碁史研究者はこれらの資料をほとんど看過してきたと言える。ここでは、前述の新解釈によって、さらに重要性が高まった新羅の古墳から出土する碁石状の石を紹介し、これらが囲碁史上にもつ意義と問題点を前稿に補足する形で検討したい。

## II. 新羅の碁石状の石と盤

新羅の古墳と寺院跡から出土した碁石状の石と盤に関して紹介する。

・慶尚北道慶州市 皇南大塚南墳出土小石群（国立慶州文化財研究所1994）（写真 1 - 3）

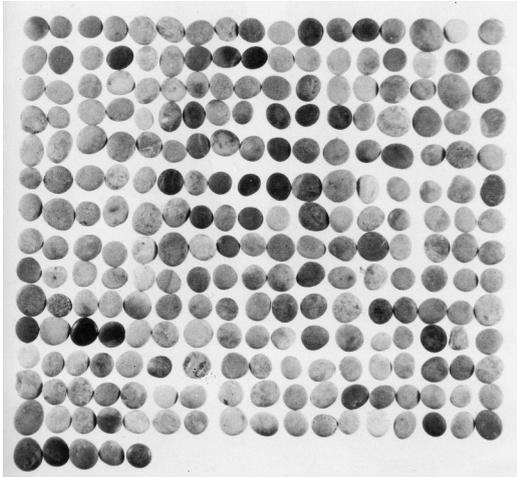


写真1 皇南大塚南墳出土小石群  
 (国立慶州文化財研究所1994)より一部  
 改変



写真2 「馬朗」銘漆器  
 (国立慶州文化財研究所1994)より一  
 部改変

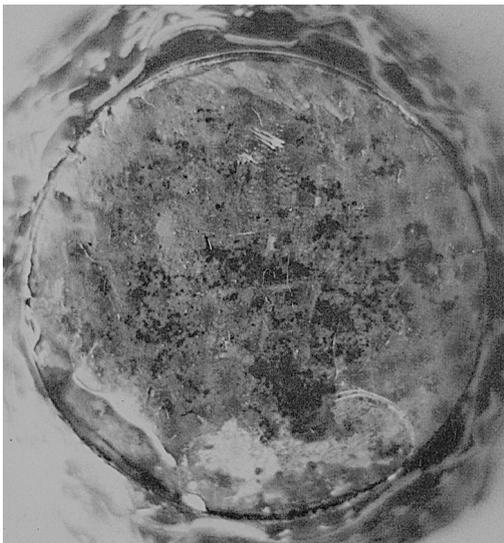


写真3 「馬朗」銘  
 (国立慶州文化財研究所1994)より一部  
 改変

5世紀第2四半期に築造された積石木槨墳である。直径約80mの円墳を南北に連ねた長径120mの双円墳である(早乙女2000, p.218)。皇南大塚南墳が先に作られ、後に皇南大塚北墳が付け足されたと考えられている。南墳は男性被葬者で、北墳は女性被葬者とされる。

碁碁関連資料は皇南大塚南墳から出土しており、副槨の主に高杯の中から243個の自然石が発見されている。直径は1cmほどで厚さは0.5cm程度である。天馬塚古墳の小石群と同様に、容器外に落ちやすい状況であったと考えられる。皇南大塚南墳の小石群も明確に白と黒に判別できるものに加えて、どちらとも判別できかねる灰色のものも存在する。

口径約9cm、器高約4cmの蓋付きの碁笥と考えられる漆器が出土しており、底には西晋代の棋聖にあげられる人物「馬朗」の銘がある。ただし、「馬朗」銘漆器は、主槨副葬品収蔵部から、小石群は副槨内から出土しており、副葬場所が異なっている点には注意が必要である(정일・이은석 2000, p.112)。

## 新羅の碁石と琴棋書画

・慶尚北道慶州市 金冠塚古墳出土小石群（濱田ほか1924、国立慶州博物館2016）（写真4）

5世紀第4四半期に築造されたと積石木槨墳と考えられている（早乙女2000, p.218）。直径約46m、高さ約12mの円墳である。副葬品には、金冠、切子玉・小玉・勾玉、金製腰佩、金銀製釧、指輪、金銅製飾履がある。

囲碁関連資料は報告書で雑類に区分されており「碁石様扁平小石 約八十個（黒白二種）」とあげられている。長径1.2-1.7cmの楕円形で厚さは0.3-0.9cmである。色調は黒灰色、橙色、褐灰色を帯びている。

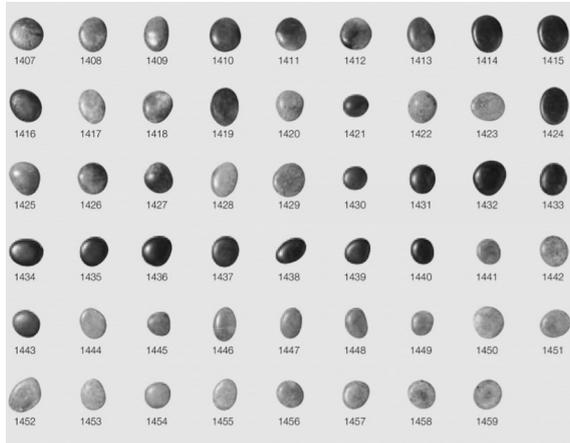


写真4 金冠塚出土小石群  
（国立慶州博物館2016）より一部改変

・慶尚北道慶州市 天馬塚古墳出土小石群（文化公報部文化財管理局1975）（写真5）

6世紀第1四半期に築造された積石木槨墳である（早乙女2000, p.218）。東西60m、南北51.5m、高さ12.7mの円墳で、冠、耳飾、釧、鈿帯などの装身具が副葬され、天馬が描かれた障泥が出土したことによって古墳の名前が命名された。

副葬品収蔵櫃の壺形漆器の下、土器群の上から小石群が出土した。白石と黒石及び白黒まだらの石で構成され、いずれも自然石である。直径1cm~2.5cmほどのもので、計350点が発見されている。現代の碁石のように白黒がはっきりしておらず中間的なものが存在する。発掘調査報告書でも碁石とはされておらず、確実な用途は不明とされていた。

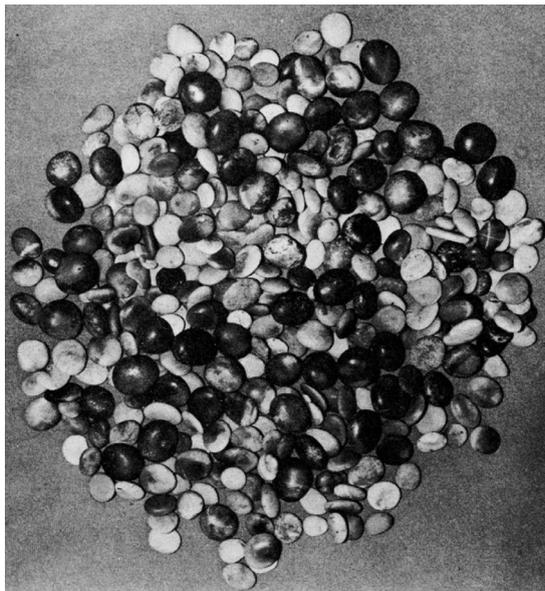


写真5 天馬塚古墳出土小石群  
（文化公報部文化財管理局1975）より一部改変

・慶尚北道慶州市 龍江洞 6 号墳出土小石群 (대구가톨릭대학교박물관 2010、李熙濬2013)  
(写真 6 - 8)

7 世紀初頭に築造された円墳で直径14m、高さ1.8mの封土が残っている。主体部は横穴式石室で土器多数の他、銅製金具、棺釘、砥石<sup>1)</sup>、墓誌石等が出土している。墓誌の銘文は判読できない。報告書によると小石群は玄室内から出土しており、長さ1.0~1.8cmで厚さ0.3~0.8cmで円形または楕円形で灰白色、灰青色、黒色のものが170点、長さ1.7~2.2cmで厚さが1cm程度の大部分が楕円形のやや赤い淡泊色のものが83点出土している。



写真 6 龍江洞 6 号墳出土小石群  
(대구가톨릭대학교박물관 2010)  
より一部改変

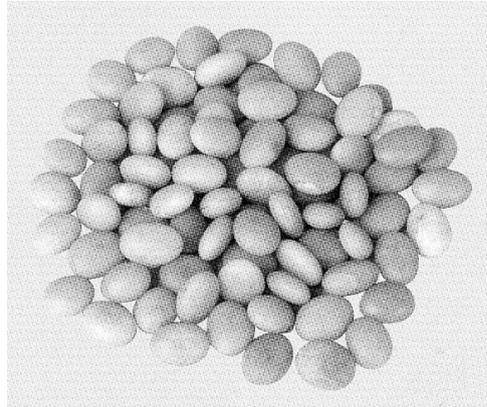


写真 7 龍江洞 6 号墳出土小石群  
(대구가톨릭대학교박물관 2010)  
より一部改変



写真 8 二群に分かれた小石群の出土状況  
(대구가톨릭대학교박물관 2010)  
より一部改変

## 新羅の碁石と碁棋書画

・慶尚北道慶州市 芬皇寺出土碁盤 (국립경주문화재연구소 2006)(図1)

芬皇寺は善徳女王 3(634年)に創建された。  
磚塔を模した多層塔の下3層分が残っている。  
そのほか幢竿支柱が現存する。統一新羅時代の  
磚に刻まれた碁碁盤と想定されるものが出土し  
ており、15路で縁がある。星はない。縦43cm、  
横42cmで、厚さは7.8cmである。

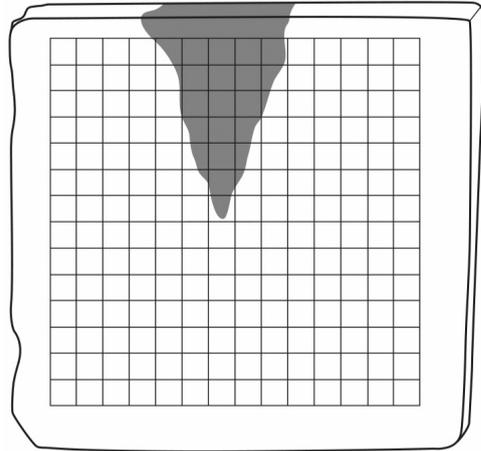


図1 芬皇寺出土盤模式図  
(網掛けは欠損部分)(清水2017)

### Ⅲ．考 察

7世紀初頭に位置づけられている龍江洞6号墳から出土していた小石群は、李熙濬によって碁石と判断されていたが(李熙濬2013)、「馬朗」銘漆器の新解釈により韓半島南部での碁碁の伝来が5世紀前半まで遡ることが確実となった。筆者も李熙濬と同様に天馬塚古墳、皇南大塚南墳出土小石を碁石と断定することには躊躇していたが、これらを碁石、少なくとも碁碁関連資料であると判断して良いことが確実になり、推論を進める上で確かな足がかりを得ることができるようになった。以下、以前に示した見解と推測したこと、今回の新発見をもととして、さらに推測を付け加えることにしたい。前稿で新羅の王陵から出土する小石と碁碁の変遷に関する見解と推測は下記の通りである(清水2017, p.225)(図2)。

- ① 碁碁盤は中国において、5星17路から5星19路に変化した、4星17路が先行する可能性がある。
- ② 韓半島北部には紀元前1世紀に5星17路盤が伝えられた可能性が高い。韓半島南部には紀元後5世紀頃に中国南朝から5星19路盤が伝わった。あるいはそれ以前に5星17路盤が伝わっていた可能性もある。その後、韓半島内で5星19路盤が9星19路盤に変化し、さらに17星19路盤に改変されたと想定する。
- ③ 日本列島には韓半島から9星19路盤と17星19路盤が伝えられたが、その後は前者のみが

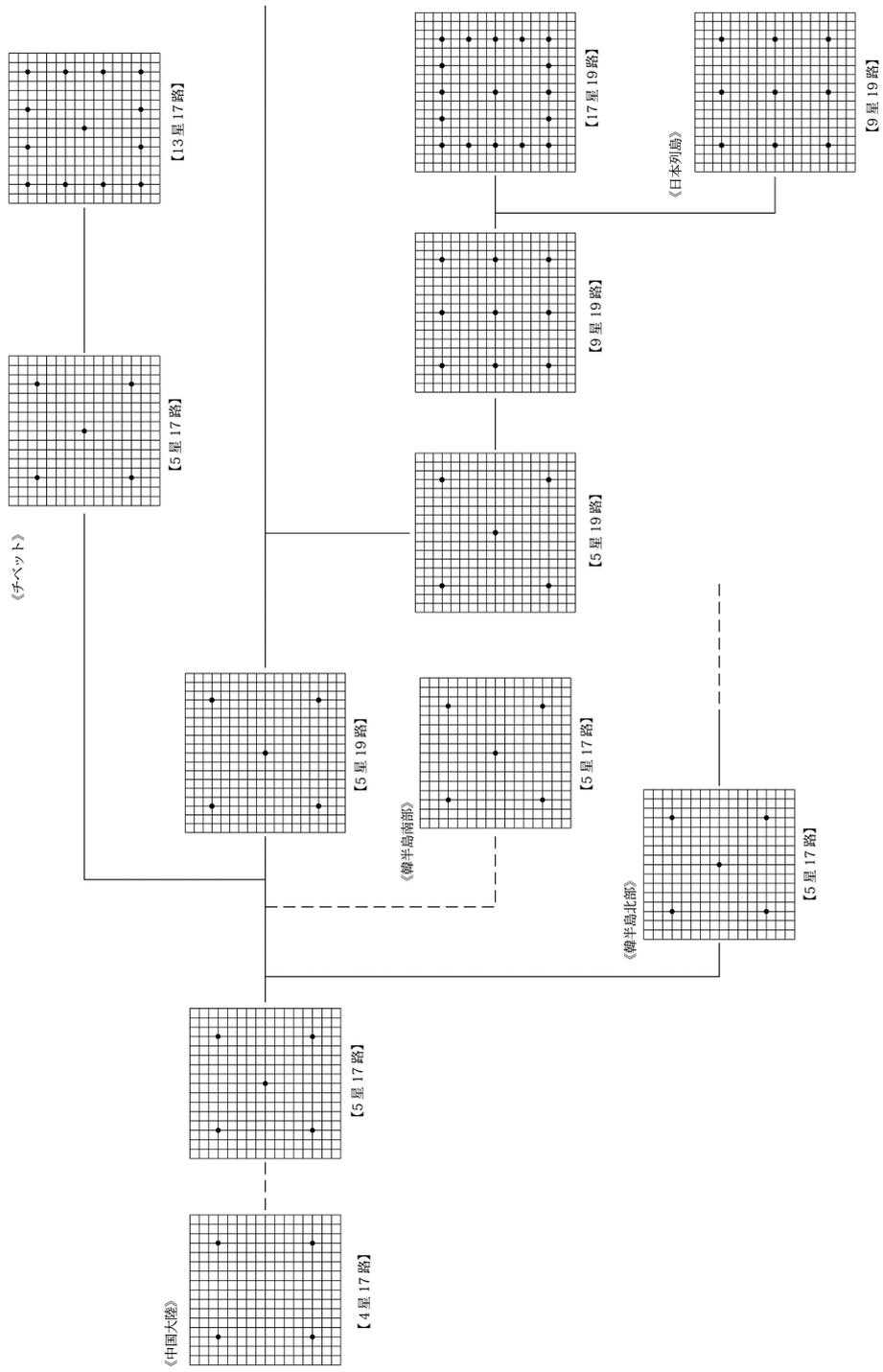


図2 碁盤の系譜関係 (位置は年代を示さない) (清水2017)

打たれた。

- ④ 5星17路盤がチベットに伝えられて、現地で星の3線配置と13星化が行われた。
- ⑤ 正倉院の木画紫檀碁局は韓半島製、2面の桑木木画碁局は韓半島製もしくは日本製と想定した。

皇南大塚南墳、金冠塚古墳、天馬塚古墳の小石群が囲碁関連資料であることが確定したが、未だ大きな問題が残っている。李熙濬は皇南大塚南墳の資料は碁石の可能性が低いとしたが、天馬塚古墳出土小石に関しては15路盤でなら碁石として使用できる白黒明確に区別できる十分な石数があると評価した。(李熙濬2013, p.140)。このように金冠塚古墳出土品も含めて、これら3者の小石群は明確に白黒が分かれるものもあるが、灰色や中間的な色合いのものが存在する。龍江洞6号墳出土品については、実用の碁石と判断して良いかもしれないが、それらのものについては、前稿でも指摘したように、このままですべての石を使用して囲碁を打つことが難しい(清水2017, pp.219-220)。この3者の小石群に関しては囲碁関連資料とするものの、碁石の実用品とするか非実用品とするかにより幾つかの解釈の可能性がある。下記に箇条書きに記すこととする。

1, 実用品

- a. 小石に彩色を施して、白黒の区別を明確にして囲碁を打った。
- b. 現在とは異なったルールで遊ばれており、白黒を明確にする必要がなかった。

2, 非実用品

1-aについては、今後も彩色の有無を検討していかなければならないが、皇南大塚南墳、天馬塚古墳、金冠塚古墳の小石があわせて約670点出土していることを考えると彩色の確認が1点もないのは、小石を彩色して碁石として使用したことに否定的な材料になる。また、それぞれの古墳から出土した小石群の中にも明確に白黒を区別できるものが存在する。そのような小石が一定程度存在するのであるから、囲碁を実際に打つのであれば、そのような白黒の弁別をつく石を集めることは、王権の中枢部にいた人物であれば、それほど難しいことではなかったろう。小石群に彩色が施されていたという想定は可能性が低い。

1-bについては、囲碁のルールの変遷にかかわることであるが、以前に中国、チベット、韓半島、日本列島での囲碁盤の変化と伝来時期を考えたことがある(清水2017, pp.207-227)。

韓半島へは前漢代に楽浪郡などが置かれた際に漢人がおこなっていたことは間違いないだろう。それがその後、韓半島に定着したかどうか、不明確である。特に漢四郡の領域に含まれない可能性の高い韓半島南部において継続的に囲碁が打たれたとは、韓半島南部の囲碁資料の出土状況からは考えにくかる。このような状況ではあるものの、5世紀前後に韓半島南部に囲碁が伝えられたと考えた場合でも、西はチベットの囲碁から東は日本の囲碁まで、細則は異なっても基本的には同じルールであること、5星17路盤が前漢代には確立していたことからしても、囲碁盤の基本形が完成して長い年月がたっており、当時の韓半島南部の囲碁が白黒不分明でも打てるようなルールであったとは考えにくい<sup>2)</sup>。そのような特殊なルールの痕跡を現代のルールからも過去の史資料からも把握することができない。

以上のことからすれば、これら新羅の王陵級古墳から出土する小石を実用品の碁石とすることはできない。したがって、「馬朗」銘漆器によりこれらの小石が囲碁関連資料とすることができるようになったとしても、非実用的な碁石であると考えべきであろう。つまり、これらの碁石は囲碁を象徴するものではあっても<sup>3)</sup>、当時、これを用いて囲碁を打つことはなかったと考えたほうが良い。中国の墳墓からも碁盤が明器として副葬されている事例は、六博の明器副葬例と同様に、湖南省湘陰県湘陰唐墓出土碁盤（湖南省博物館1972）、中国湖南省岳陽市桃花山唐墓出土碁盤（湖南省文物研究所2006）などに存在しており、必ずしも実用品の囲碁盤と碁石が被葬者の側に置かれなくても送葬の場においては十分であることが想像できる。皇南大塚南墳において「馬朗」銘漆器が主槨に、小石群が副槨に副葬されることなども非実用品的性格を示す可能性がある。

前稿では皇南大塚南墳小石群と天馬塚古墳小石群の数をもとに前者を5星17路盤、後者を5星19路盤の囲碁と推測し、5星19路盤の囲碁は中国南朝から最新のものが伝わったと考えた（清水2017, pp.207-227）。いずれも実用品の碁石でない以上、前稿の見解を断定することはできないが、その後の19路盤の9星化については韓半島内で起きた事象と類推した。それは、置き石を増やすというような囲碁の興趣を損なうような改変は、既に名手を多数輩出し、打ち手の技量が高かった中国大陸でおこなわれた事ではなく、中国大陸に比べて打ち手の技量が相対的に低かった韓半島でおこなわれたと考えたからである。

5～6世紀の新羅の最上位の支配層が埋葬された王陵級古墳から出土した3件の小石群が、いずれも実用品でない点については注意を払うべきであろう。新羅の王陵級古墳に明器と言ってよい碁石が副葬されていたことは、これらの被葬者は生前の生活において囲碁を打つことがなかった可能性すらもある。最上位の支配層が囲碁を実際に打たなかったとすれば、当時、韓

半島南部の碁打ちの技量が相対的に低かったことを示すのではなからうか。

それでも囲碁関連資料が王陵級の古墳に副葬される理由は、囲碁は「琴棋書画」四芸<sup>4)</sup>のうちの一つとされるもので、知識階級が身につけておくべきものと考えられ、皇南大塚南墳の被葬者が生活していた5世紀前半の韓半島においても囲碁が支配者層の「知」を象徴するものであったと考えることもできよう。

次に「琴棋書画」という概念と用語の成立時期について考えてみたい。『抱朴子』内篇卷十二辯問篇には、「棋聖」として「馬朗」の別名「馬綏明」ともう一人の名人「巖子卿」の名が記されている。抱朴子は「ある人の最大の長所、衆人の及びもつかぬところを指して、これを聖と呼ぶ。」とする。各種の「聖人」を列挙するが、ここで筆頭にあげられているのが「棋聖」である(葛洪1990a, pp.246-248)。琴に関する記述はないものの「棋聖」に続き「書聖」として「皇象」と「胡昭」の2名があげられ、さらに「画聖」が続き「衛協」と「張墨」の名が記されている。これをみれば、琴を除く「琴棋書画」がまさにこの順番で列挙されているのであり、中国大陸では『抱朴子』が記された4世紀前半に各種技芸のうち「書」、「画」とともに囲碁が特に重要視されていたことが確認できる。『抱朴子 外篇』卷三十二尚博篇では伯牙と鍾子期について触れるが、それとともに「琴を弾く人は至って多いが、夔(堯の楽官)・師襄(孔子の音楽の師)だけが珍しい音感の持ち主とたたえられる。」とする(葛洪1990b, p.18)。辯問篇で「琴聖」として夔、師襄があげられなかった理由は、まさに道士でもある葛洪が、伯牙の琴の技量が遙かに両者を超えると考えており、加えて伯牙を神仙の一人ととらえていたからであろう。林巳奈夫も鏡背文様の伯牙像と唐代の『楽譜解題』の記事から、伯牙を「神仙の類」とする(林1973, pp.42-43)。『抱朴子 内篇』卷十二辯問篇の当該部分は、「もし、仙人がだれでもなれるものなら、聖人はどうにしておおせていた筈」という問いに対して、抱朴子が「聖人が必ずしも仙人になるとは限らないし、仙人が必ずしも聖人にはならない。」(葛洪1990a, p.245)と答え、続いて、仙人にならなかった聖人を列挙するのである<sup>5)</sup>。春秋時代晋の大夫であったという琴の名手白牙は聖人であったとともに、神仙思想を示す神獸鏡の主要な文様に採用される神仙の一人であったので(図3)ここで挙例しなかったに違いない。

青木正兒によれば、「琴棋書画」の最も早い使用例は唐代玄宗の頃の何延之の「蘭亭記」の記述であり、「琴碁」と併称するものは梁の沈約「齊太尉徐公墓誌」にあるものの(青木1964, pp.6-7)いずれも『抱朴子』よりも新しい史料である。「琴棋書画」という用語こそ確認されていないが、4世紀の前半には既に「琴」「棋」「書」「画」というものが特別に知識階級の

生活に重要なものと理解されていたことは、「棋」「書」「画」の順で『抱朴子』に記述されることから判断できよう。そこでは「琴」こそ記されていないが、これは先述した「伯牙」との関係からであり、「琴棋書画」の概念と用語がこの時点で既に確立していたと考えて良い。

龍江洞6号墳の小石群は、5～6世紀の王陵級古墳から出土する小石群より白黒がはっきりとしており、李熙濬の指摘によれば実用品の可能性が高い(李熙濬2013)。碁石の数が253点ということなので、発掘等による若干の

遺失を考慮すると17路盤の囲碁と考えた方がよからう。筆者の推測では天馬塚古墳出土小石群をもとにこの時期には19路盤で囲碁が遊ばれていたと想定したが、17路盤から19路盤への変化は一斉におこなわれたものではないとも考えており(清水2017, pp.214-215, pp.223-235)。7世紀初頭の龍江洞6号墳出土碁石が17路盤で打たれたものと考えても韓半島での碁盤の変遷感に矛盾は生じない。また、統一新羅時代の碁盤と考えられる芬皇寺出土資料は埴の上に15路盤が描かれており、囲碁盤変遷の主流である17路盤、19路盤以外に路数を省略した多様な囲碁盤が古代の韓半島で遊ばれていたことを示している<sup>6)</sup>。

韓半島への囲碁の伝来については、渡部義通の見解が重要である。渡部によれば、「ゴ(碁)」という言葉は呉音であり、日本に「棋」ではなく「ゴ(碁)」という音と用字が定着したのは、伝来時期に関わる可能性が高く、あわせて初期の囲碁の駒の材質は木製であったことが想定されている(渡部1977, pp.5-8)。考古資料として、将棋類については盤よりも駒の発見例が明らかに多いものの、囲碁については盤の発見例も比較的多い。これらのことも囲碁の駒は漢字「棋」が示すように本来の材質は、木製であったことを示している可能性が高い。

17星19路盤が中国南朝から韓半島へ伝えられた可能性が指摘されているが(谷岡2013)、この説には異論を持つものの、5星19路盤が5世紀に中国南朝から韓半島に伝えられたことを以前に指摘した(清水2017, pp.220-225)。正倉院宝物によれば、その後、韓半島から日本へは9星19路盤と17星19路盤が伝えられたものと思われ、その結果として日本列島と韓半島には、「棋」ではなく呉音である「ゴ」と「碁」の用字が定着したものと考えられよう。



図3 画文帯神獸鏡の伯牙弹琴像(中央上段が伯牙)(奈良県立橿原考古学研究所2008)より一部改変

## 新羅の碁石と琴棋書画

今のところ新羅の墳墓からの囲碁関連資料が目立ち、三国時代に韓半島南部を支配していた百済の墳墓からの出土品は知られていない。中国南朝と濃厚な関係を示す武寧王陵副葬品にも囲碁関連資料が見られないことは実に不思議である。ただし、成立年代は新しいものの『三国史記』（1145年）にみられる韓半島最古の囲碁関連記事は、高句麗の僧道琳と百済の蓋鹵王との話であり、その舞台は5世紀後半の百済王宮である。いずれ、5～6世紀の百済の遺跡からも囲碁関連資料が出土すると考えた方がよかろう。

『馬朗』銘漆器という棋聖に関わる文物が新羅の王陵級古墳から出土したことにより、「琴棋書画」という概念が当時の韓半島南部にも伝わっていた可能性も否定はできないが、「琴」はともかくとして「書」と「画」については、今のところ考古学資料の積極的な裏付けはない。今後の検討課題であろう。

## IV. まとめ

정일과이은석による「馬朗」銘漆器の新解釈をもとに、新羅時代の碁石の見直しとそれに關する若干の考察をおこなった。以下に、史資料をもとに判断したことと推測したことを列挙する。

- 1, 皇南大塚南墳、金冠塚古墳、天馬塚古墳など新羅の王陵級古墳から出土する小石群は、囲碁関連資料であっても碁石の実用品と考えることはできない。
- 2, 王陵級の古墳に、実用の碁石が副葬されないことは、5世紀から6世紀初頭の新羅の支配層に技量の高い碁の打ち手が少なかったことを示している状況証拠と考えた。
- 3, 龍江洞6号墳出土碁石は実用品であれば17路盤で打たれたと推定でき、芬皇寺出土盤は15路盤であることが知られている。韓半島では後代の資料も併せて、新旧を含む多様な囲碁盤が長い間併行して打たれていた可能性がある。
- 4, 『抱朴子』が執筆された4世紀前半には、「琴棋書画」という用語自体は確認されていないが、「琴聖」は伯牙の持つ性格によって省かれるものの、『抱朴子』に「棋聖」「書聖」「画聖」の順に記述されていることにより、「琴棋書画」という概念と用語がすでに確立されていたと想定できる。

## 謝辞

この論文を執筆するにあたって、下記の方々にご援助いただきました。記して感謝いたします。

岡見知紀、菊池望、鈴木朋美、畑野吉則、松村政樹、李恩碩、龍崎純子。

## 〔注〕

- 1) 小石群から近い場所で出土しており、砥石ではなく文鎮のようなものではないかと推定されている(李熙濬2013, p.134)。
- 2) 松村政樹によれば、中間的な色調の碁石を用いる場合、目隠し碁を打てるような技量の遙かに高い打ち手同士なら、このような小石でも対局は可能であるとのことである。しかしながら、後述するように囲碁盤の9星化、17星化が起こったのは当時の韓半島には技量の高い打ち手が多くなかったからと考えているので、この仮説が成立する可能性は極めて低だろう。
- 3) 김태식은、これらの小石を囲碁関連資料ではなく、道教の丹薬を象徴する代用品とみなしている(김태식 2003, p.208)。
- 4) 「四芸」については、和製用語の可能性が指摘されている(青木1964, p.5)。
- 5) 葛洪は、聖人が仙人になった事例はまれであると考えていたようである。仙人となった聖人としては「黄帝」をあげている(葛洪1990a, p.246)。
- 6) 全羅北道扶安郡ユチョルリ(유천리)遺跡出土からは、高麗時代に属する青磁製碁盤の5×6路分の破片が出土している(大韓民国国立中央博物館展示品解説)。星は4×4の位置にあるものの他の星は破片のため確認することができない。唐代以前の囲碁盤と同様に縁が存在せずに碁盤の端が一路となっている。現状では縁のない囲碁盤として、最も新しい資料であろう。この資料も既に縁のある碁盤が盛行していた時期に、韓半島では古い形態の碁盤が打たれていた実例である。

さらに後の14世紀前半の資料であるが、韓半島全羅南道新安那智島邑道の水中から出土した新安船から、16路盤もしくは21路盤の囲碁盤の可能性が指摘されているものが出土している(문화재청ほか2006, 안영이 2005)。しかし、船上で打たれたものであることを除いても、19路盤以上のものを想定するのは難しいだろう。仮に囲碁盤であったとしても、日本の将棋駒も出土しており、打ち手の帰属国は不明である。

## 〔参考文献〕

・日本語

- 青木正兒『琴碁書畫』増補版 春秋出版社 1964  
葛洪(本田濟 訳注)『抱朴子 内篇』平凡社 1990a  
葛洪(本田濟 訳注)『抱朴子 外篇』2 平凡社 1990b  
早乙女雅博『朝鮮半島の考古学』同成社 2000  
清水康二「東アジア盤上遊戯史研究」明治大学大学院文学研究科 2016年度博士学位請求論文 2017  
谷岡一郎『囲碁十九路盤の起源 創世と伝播に関する「統合〔元嘉暦〕仮説」』大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2013  
奈良県立橿原考古学研究所(編)『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所 2008  
濱田耕作・梅原末治『慶州金冠塚と其遺寶』本文上冊 古蹟調査特別報告第3冊 1924  
林巳奈夫「漢鏡の圖柄二、三について」『東方學報』44 京都大学人文科学研究所 1973  
渡部義通『古代碁碁の世界』三一書房 1977

・韓国語

- 国立慶州文化財研究所(編)『皇南大塚南墳発掘調査報告書』文化財管理局・文化財研究所 1994  
국립경주문화재연구소(編)『특별전 芬皇寺 출토유물』그라픽네트 2006  
国立慶州博物館(編)『慶州金冠塚(遺物編)』日帝強占期資料調査報告23輯 国立慶州博物館 2016

## 新羅の碁石と琴棋書画

- 김태식 「신선의 왕국, 도교의 사회 신라 적석목곽분과 그 시대를 중심으로」 『문화재지』 36  
국립문화재연구소 2003
- 대구가톨릭대학교 박물관(編) 『경주 근화여중고 신축부지내 慶州 龍江洞 古墳群 I(第1區間)』  
대구가톨릭대학교 박물관 2010
- 文化公報部文化財管理局(編) 『天馬塚』 文化公報部文化財管理局 1975
- 문화재청, 국립해양유물전시관(編) 『新安船 THE SHINAN WRECK I 본문편』 문화재청, 국립  
해양유물전시관 2006
- 안영이 『다시 쓰는 한국바둑사 한국바둑 2천년의 비밀』 韓國棋院 2005
- 李熙濬 「7세기 초 신라 고분 출토 바둑알과 그 의미」 『嶺南學』 24, 2013
- 정일 · 이은석 「황남대총 남분출토 ‘馬朗’ 명 칠기의 의미」 『중앙고고연구』 27 중앙문화재연구원 2018

### ・中国語

- 湖南省博物館(編) 「湖南省湘陰唐墓清理簡報」 『文物』 11 文物出版社 1972
- 湖南省文物研究所(編) 「湖南省岳陽市桃花山唐墓發掘調查報告」 『文物』 11 文物出版社 2006